**説教20230625マタイ10：24-33「主は皆さんと共に、又あなたと共に」**

**私がお隣の別府不老町教会に遣わされましたのは、３年余り前のことで、ちょうどコロナと一緒に私はこの別府の地へと遣わされました。今思い返しますと、コロナ渦中と言いますのは、説教者にとって、大変な向かい風であり、試練の時でありました。と言いますのは、聴衆たちが、説教に集中するのでなく、会堂の衛生状態や風の流れに、気を使っていたからです。これでは、会堂が聖霊に満たされるどころか、会堂が恐れと不安とに満たされて、説教も耳に入らないのです。**

**それで、この５月にコロナが5類になって、普通の風邪になるのだということを聴きまして私は内心、大変喜んでおりましたが、その喜びは半分ぬか喜びになってしまいました。コロナが５類になったはいいが、誰も、マスクを外さないのです。コロナの時に会堂に満ちていた恐れと不安の霊は、未だ会堂に居残っている様であります。**

**私が想定していたのは、コロナが５類になり、ただの風邪となったので、みんなコロナへの恐怖から解放されて、マスクも外して、満面の笑顔を見合わせながら、会堂で心置きなく主を礼拝賛美する姿だったのでした。**

**そう言う豊かな祝福の時を私は期待していたのですが、御心はそうではなかったのでした。相変わらず、人々は目に見えないコロナをおそれているのであります。**

**人々が恐れているのは果たしてコロナ菌だけでしょうか。。。人々はコロナ渦中にあって、純粋にコロナ菌だけをおそれていたのではありません。コロナ菌と同時に、人々はコロナ菌を人から移され人へ移すことを恐れました。そして人から非難され、仲間はずれにされることを恐れました。人の目を恐れました。そして、そう言った恐れは、コロナ菌が過ぎ去った後でも、しつこく私たちに絡みついて、私達を捕えて離さないのです。**

**マタイによる福音書 10章 26節**

**「人々を恐れてはならない。」イエス様はこの様に言われています。この御言葉は、今、この状況下で生きている私たちが、四六時中忘れないで、常に実行していくべき御言葉であります。**

**恐れには良い恐れと悪い恐れとがあるという様によく言われますけれども、ここで「人々を恐れてはならない」と言われている処の恐れは、悪い恐れのほうに当てはまります。**

**「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。」「あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。何事も思い煩ってはならない。」このようにイエス様は私たちに言われています。**

**人をおそれる、人と人とがおそれあうということは、その始まりは小さなきっかけであるかもしれません。ある人が、何かわからないけれど押しが強くて、その人に反論するのも面倒だということで、その人の意のままに従っていると、いつの間にか、その人の周りに人々を恐れ合う仲間が形作られているなどということが起こります。私たちは、知らず知らずの間にお互いに恐れ合うグループを作り、そんな自覚もないままにそのグループに身を置き続けると言ったことが起こります。**

**今日、イエス様は、そのようにお互いに恐れ合っている人々の間に立って「人々を恐れてはならない。」という御言葉を聞かせて下さったのでした。**

**お互いが恐れ合っている処には、覆われている物事、隠されている物事が沢山あります。暗闇もたくさんあります。いわゆるタブーという物事もたくさんあります。しかし、イエス様の目には、全てがお見通しであり、全てが知られています。イエス様は暗闇で、私たちに、正しいことや良いことを耳打ちされるのです。**

**２７節**

**わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。**

**屋根の上で言い広めなさい、とイエス様が言われているのは、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」と私たちに言われている大伝道命令のことであります。屋根の上で言い広め、と言うのはかなり比喩的表現ですが、私たちはそのように折がよくても悪くても、いたるところでイエス様のことを宣べ伝えているのです。**

**今日の様に、人々がお互いに恐れ合っている世の中に在りましては、なかなか胸を張って、元気よく教会へと人をお誘いするにも正直、骨が折れるところがあります。お誘いする相手のことを気遣いながら、イエス様の救いの福音を語っていかねばなりません。**

**私も、福音伝道の途上において、心が萎え、おくびょうと人をおそれる霊に取り付かれそうになってしまいます。又、誰でも福音伝道に従事する人はこの様な不安との葛藤の中でその業をすすめておられることと思います。**

**28節以下**

**体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。**

**あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。**

**だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。**

**これが悪い恐れの中にある私たちに対するイエス様の励ましの御言葉でありますが、イエス様の父であり、又私たち一人ひとりの父でもある主なる神は、この様に私たちの全てを髪の一本までご存知であり、又私たちの過去も未来も全てご存知の方であります。この父なる神は、まことに畏れ多い方であります。**

**今、人と人とが恐れ合っている、この状況の中で、イエス様は、父なる神こそ恐れなさいと言われます。つまりイエス様は、私たちが恐れる相手を選びなさいと言われているのです。人をおそれるのでなく、父なる神こそを畏れなさいとイエス様は言われます。**

**恐れには良い恐れと悪い恐れとがあるという様に言われますが、私たちは恐れの思いや感情を、父なる神にこそ向けることによって、それ恐れは悪いものからよいものへと変えられるのです。**

**さて、父なる神をおそれるということをもう少し黙想してまいりましょう。**

**今日の主日は大分地区交換講壇として礼拝をお捧げしています。その目的は、大分地区の諸教会が、主にある交わりを深め、主にある一致を形作り、益々、主に在って一つとされるという御心を、実際に推し進めていくということです。清野量先生は別府教会へ遣わされています。そして別府不老町教会には隠退牧師の林邦夫先生が遣わされています。**

**私たちは、今日、主にある教会の一致が、一歩でも勧められていますことを喜び、主に感謝と賛美を捧げて参りましょう。**

**今日、別府不老町教会で語られている聖書箇所はヨブ記２３章であります。この聖書箇所は、ヨブの父なる神に対する愛情と、それと裏腹にある父なる神へのおそれとを、豊かにそして切実に語っていますので、全文を味わってみたいと思います。**

**ヨブ記 23章　旧約聖書805ページからになります。**

**ヨブは答えた。**

**今日も、わたしは苦しみ嘆き／きのために、わたしの手は重い。**

**どうしたら、その方を見いだせるのか。おられるところに行けるのか。**

**その方にわたしの訴えを差し出し／思う存分わたしの言い分を述べたいのに。**

**答えてくださるなら、それを悟り／話しかけてくださるなら、理解しよう。**

**その方は強い力を振るって／わたしと争われるだろうか。いや、わたしを顧みてくださるだろう。**

**そうすれば、わたしは神の前に正しいとされ／わたしの訴えはとこしえに解決できるだろう。**

**だが、東に行ってもその方はおられず／西に行っても見定められない。**

**北にひそんでおられて、とらえることはできず／南に身を覆っておられて、見いだせない。**

**しかし、神はわたしの歩む道を／知っておられるはずだ。わたしを試してくだされば／金のようであることが分かるはずだ。**

**わたしの足はその方に従って歩み／その道を守って、離れたことはない。**

**その唇が与えた命令に背かず／その口が語った言葉を胸に納めた。**

**神がいったん定められたなら／だれも翻すことはできない。神は望むがままに行われる。**

**わたしのために定めたことを実行し／ほかにも多くのことを定めておられる。**

**え／考えれば考えるほど、恐れる。**

**神はわたしの勇気を失わせ／全能者はわたしをおびえさせる。**

**わたしは暗黒を前にし／目の前には闇が立ちこめているのに／なぜ、滅ぼし尽くされずにいるのか。**

**このヨブの述懐をよく読みますと、ヨブが父なる神の愛を求めて、恋い慕い求める情念と、それと同時に深まっていく、神への恐れとがよく読み取れるでしょう。それはあたかもヨブの父なる神に向けての恋文の様であります。**

**さて、この様に、父なる神と、神の民の間柄が、恋愛をする男女の情念に喩えられるのは、何もヨブに限ったことではなく、聖書全体に貫かれている、正しい思いであります。わかり易いところでは、旧約聖書に雅歌と言うのがあります。旧約聖書1049ページからになります。**

**雅歌１章4節**

**お誘いください、わたしを。急ぎましょう、王様／わたしをお部屋に伴ってください。**

**宗教改革者のルターやカルヴァンを皆さまどんなふうにイメージされているでしょうか。ルターは命をも惜しまない闘う人であり、カルバンは、極端に禁欲的な人であったなどと昔の人ですので自由に私たちの想像が膨らんでしまいますが、実は二人とも、主いえす・キリストを心から、最愛の花嫁の様に恋い慕った人たちでありました。彼らは、この世で結婚をしましたが、彼らが愛する花嫁よりも、イエスキリストをより愛していたことは間違いがないことでしょう。そして、二人ともこの雅歌を大変重んじて愛唱していたのでした。**

**つまりルターやカルバンがよって立つ信仰の中心には、最愛のイエスキリストが常にあり、彼らはイエスキリストによって支えられていたのでした。**

**旧約聖書ではよく、父なる神のことが熱情の神という様に呼ばれていますけれども、これは新しい聖書協会共同訳では、ねたむ神という、生々しい表現に改められています。**

**出エジプト記 34章 14節**

**他の神にひれ伏してはならない。主はその名を妬みと言い、妬む神だからである。**

**主イエスキリストは、愛の人であるゆえに、又、ねたむ神でもあります。そのイエス様は次の様に私たちに言われています。マタイによる福音書 10章 32節以下**

**「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う。」**

**このイエス様の御言葉を聞いて、皆さまどのように思われるでしょうか。ある方は、主イエスに対する恐れがいや増されるかも知れません。しかし、主イエスが、一面、ねたむ神でもあられることを理解する時、私たちは、その恐れを払しょくされて、とにかくイエス様の処へ走り寄って、イエス様にすがりついて助けを求める者とされるのではないでしょうか。私自身も、そのような心境で常にイエス様と共にこの地上を歩んでいる者の一人であります。**

**「主は皆さんと共に、又あなたと共に」今日の説教題であるこの文言は、日本聖公会の祈祷文の中から採ってきました。願はくは、この地上にある全ての教会が、イエス様と相思相愛となって、益々一つとされて共に歩んで行かれますことを願い今日の説教を終わります。**